

日大豊山水泳部の軌跡 3

昭和 35(1960)年、石井氏がローマオリンピックで活躍した年に日大豊山水泳部は関東大会で初優勝を遂げた。

その原動力となったのは井上敦雄先生と同学年の福島滋雄氏である。

福島氏は背泳ぎと個人メドレーを専門種目とし、井上敦雄先生の話によると 180cm という長身を生かした正統派の泳ぎでフォームが美しい理想的な泳法だったということである。

大学進学後から頭角を現し、日本選手権では 200m 背泳ぎで 7 連覇した。

昭和 37(1962)年にはオーストラリア国際水泳大会で 220 ヤードの背泳ぎと 440 ヤードメドレーリレーで世界新記録を樹立した。

また同年には 100m・200m 背泳ぎ・400m 個人メドレーで日本記録を樹立している。

そして昭和 39(1964)年、東京オリンピックに出場し、200m 背泳ぎで第 4 位、400m メドレーリレーで第 5 位に入賞した。

アメリカの水泳コーチは福島氏の泳ぎを水中カメラやその他でフィルムにおさめ、徹底的に研究したという記録がある。

その後も昭和 41(1966)年にバンコクで開催されたアジア大会において 200m 背泳ぎで優勝した。

また、昭和 38(1963)年の 2 月に開催された全豪選手権に派遣された選手が当時 3 年生であった青木守喬氏と 2 年生の石川健二氏である。

翌年に開催される東京オリンピックのために生かす試合として男子選手は高校から 12 名が選抜されている。

当時の日本水泳連盟機関紙『水泳』(第 151 号)によると、1 月 6 日に山代に集合し約 1 か月間の合宿、2 月にはオーストラリア各地を 3 か所転戦しながらパースの全豪選手権に出場するという大変な遠征であったようだ。

記事によると、「この困難な日程を乗り切る方法は選手団の和と選手個々の意欲高揚と節制以外にないと判断し特にブリスベン、シドニー、メルボルンの転戦中に団体行動の厳守、外出禁止、食事の統制、観光気分の排除 “自己の最高記録はパースで出すんだ” と云う意欲の注入に全力を挙げる必要があります」という選手団の気持ちの入れようである。

この遠征に関する記事には、その当時取り入れられたインターバルトレーニングの練習内容が詳しく掲載されているのも興味深い。

その甲斐あってか、青木氏は 100m 背泳ぎで前年度のベストを大きく更新する目標タイムを出し、石川氏も 100m 平泳ぎで目標タイムをクリアしている。

石川氏は高校在学時から日本新記録を出し数々の国際大会に出場した。

高校 2 年時の第 4 回アジア大会では 100m 平泳ぎで金メダルを獲得、大学進学後は福島氏と共に出場した東京オリンピックで 400m メドレーリレーにおいて第 5 位に入賞した。

東京オリンピックのメドレーリレーに 2 名の日大豊山 OB が出場したことは誇りとされることである。

そして石川氏が高校 3 年の昭和 38(1963) 年には念願であったインターハイ初優勝を果たした。



日本高等学校選手権水上競技大会初優勝 (38年)

石川氏は 100m・200m 平泳ぎで優勝し、その原動力となった。

得点は、第 1 位日大豊山 92 点 第 2 位柳井商工 54 点 第 3 位桜宮 27 点 第 4 位三潴 17 点 第 5 位諫早商 14 点 第 6 位磐田農 11 点で、断トツの総合優勝である。

当時の井上隆コーチの情熱は素晴らしい、自営業(設計事務所)であったが朝練習・午後練習でも絶対に休むことなく熱心に指導にあたり、コーチ就任5年でインターハイ総合優勝を成し遂げた。

井上脩氏と同様に無報酬での毎日に指導に頭が下がる想いでした、という井上敦雄先生の『二十年誌』回顧録がある。

その情熱を私たちも引き継いでいかなければならない。